

# 田澤義鋪の宿泊講習実践における青年教育思想

— 地域におけるかかわり創出検討の手がかりとして —

三 瓶 千香子

A Study of the Young Education Philosophy  
of Yoshiharu Tazawa in Lodging Training Practice  
— with Consideration for the Creation of Relationships  
and Involvement in the Local Community —

Chikako Sampei

## < Abstract >

The collapse of local communities and serious social isolation have been long-term problems in Japan. The present study aimed to study the young education philosophy of Yoshiharu Tazawa(1885-1944), a rational and practical leader of a young men's association called *Seinen-dan* in modern Japan, as it relates to creating relationships and involvement in modern local communities. Tazawa thought that personal relationships and contact or cohabiting between lecturers and young people were very important in the lodging training. This leads to a suggestion for roles and methods of facilitators to affect learning and relations on purpose through dialogue, collaboration and creation.

**Key words** : Yoshiharu Tazawa, Adult and Community Education, Young Education Philosophy, Relationships and Involvement, Facilitator

## 1. かかわりの機会の貧困化

本稿は、地域社会における「かかわりの創出」を検討するための予備的考察として、田澤義鋪（1885（明治18）年-1944（昭和19）年）の教育思想、特に青年教育思想を考察しようとするものである。田澤は、近代日本における青年団運動の中心的人物であり、理論的、実践的指導者である。内務省官僚、協調会理事、東京市助役、貴族院議員、大日本青年団理事長などを歴任し、多様な実践を以て独自の公民教育論、政治教育論を展開したが、彼の人生を貫いた実践と言え、共同生活論に立脚した青年教育および青年団指導である。多様な人々とかかわり、学び、実践に移すということはどういうことかを整理するために、まずは歴史的水脈から田澤の青年教育論に迫ってみたいということが、本稿の視点である。

ところで「無縁社会」という言葉に象徴されるように、日本の地域社会の崩壊が問題視されて久しい。日本はOECD（経済協力開発機構）加盟国の中で「友人や職場の同僚など家族以外との交流がない人の割合」が最も高く<sup>1</sup>、病気や一人ではできない作業の時に頼れる存在の有無を問う内閣府の国際比較調査でも「友人」や「近所の人」の比

率は日本が最も低い<sup>2</sup>。これは特別な社会的交流が存在しなくても、生活に支障が生じない経済的成熟社会が成立しているといった見方もあるだろう。しかし、鷺田清一が柳田國男の「孤立貧」の拡散を危ぶむ論を借りて、「困窮する個人をぎりぎりのところで孤立させないための保護膜のような」血縁、地縁、社縁が若い世代にとっては「鬱陶しい包囲網のようなものとして甘受されてきた」結果、孤立への怖れは高齢者に限らず若い世代の心も深く蝕ばみ、低所得、非正規労働、非婚などの生活を余儀なくされ、「縁を紡ぐ機会そのものを殺がれている」と現代社会を表現するように<sup>3</sup>、日本が抱える社会的孤立の状況の深刻さを考えるとき、地域社会におけるかかわりの創出が喫緊の課題であるといえよう。

近年、周知のように政治学、法学、経済学、経営学など諸分野においてソーシャル・キャピタルが注目されている。ソーシャル・キャピタルの概念認知に大きく影響をもたらしたロバート・パットナム (Robert.D.Putnam) は、「調整された諸活動を活発にすることによって社会の効率性を改善できる、信頼、規範、ネットワークといった社会SOS期の特徴」とそれを定義したが<sup>4</sup>、地域づくりにおいてもその役割が論じられるようになってきている。ソーシャル・キャピタルには、閉鎖的な結束型 (Bonding) と橋渡し型 (Bridging) があるとされる。前者は地域や社会階層など同じグループ内で結束を固めるような、いわゆる伝統的地縁・血縁関係であり、後者はテーマや問題意識を共有するNPO活動やボランティア諸団体などが挙げられよう。いずれのタイプにしても、今後の地域社会においては重要なキャピタルであることは論を俟たない。

また筆者が本稿において教育思想に着眼した理由として、今日子ども・若者の他者や社会へのかかわりの意識の希薄化あるいは回避的心理の高さに危機感を持ったことが挙げられる。「平成26年版子ども・若者白書」によれば、「私の参加により、変えてほしい社会現象が変えられるかもしれない」という社会問題への関与や自身の社会参加についての項目において、アメリカ52.9%、ドイツ52.6%、韓国39.2%に対して日本の若者は30.2%と諸外国と比べて相対的に低い<sup>5</sup>。そればかりではない。この調査では、日本の若者の自己肯定感も調査対象国の中で最も低いことも示されている<sup>6</sup>。

青少年の居場所を研究する田中治彦によれば、社会教育に関係して青少年が大きく変化したのは、子どもの集団離れだという<sup>7</sup>。1960年代の高度経済成長と急速な都市化、進学率の上昇に伴って、1970年代には青少年は自由に遊べる空間の喪失、過密な教育カリキュラムによる自由な時間の喪失、仲間集団の喪失といういわゆる「三間」を失った。さらに、1980年代にオーディオ機器やゲームなど遊びの選択の多様化が進んだと同時に、本来、学校では体験できない活動を仲間と共に楽しみ、学ぶ魅力を持つ青少年団体が忍耐を強いるものと認知され、地域社会において自発的な集団がほぼ消滅した。成熟社会を迎え、価値の多様化、居場所の多様化が進めば、青少年は個として生活と学習の多様な選択肢をもつことはできるようになってはいるが、それは一方で、多様な背景や年齢、価値観を持つ他者との活動、交流、対話の機会、たまり場、居場所を喪失したともいえる。すなわちそれは、仲間とともに社会にかかわるといふ機会ひいては人間形成そのものの大きな機会を失くしているともいえよう。しかし、これは今や青少年に限ったことではない。上述した我が国の社会的孤立感の深刻さを見ると、年齢や世代を区別することなく、地域社会へのかかわりをいかに創り出していけるかは喫緊の課題といえる。

地域社会において、人々が継続的にかかわりを深められる機会の創出には何が必要なのだろうか。本稿ではその手がかりとして、近代日本の社会教育史におけるかかわり創出の思想、特に田澤義鋪の教育論にたずね、これからの地域社会とのかかわりにつなぐ可能性を考察してみたい。

## 2. 田澤を「実践者」として捉えた諸研究

先にも紹介したように田澤は、社会教育史においては近代日本における青年団運動の理論的、実践的指導者として認識あるいは位置づけされている人物である。東京帝国大法科大学政治学科で学んだ後、内務省に入り25歳の若さで

静岡県安倍郡の郡長に任命されている。そこで地域の農村青年、勤労青年に対する教育、自己修養、語らいの場の必要性を感じた田澤は、農村青年教育、特に青年団指導に注力する。のちに彼の代表的な「かかわり創出」のメソッドとなる青年と寝食を共にする宿泊講習を企画・実施し始めたのもこの時期である。

1915（大正4）年には、内務省明治神宮造営局書記官兼内務書記官に任命される。欧州大戦の影響による物価の大暴騰、労力不足といった造営工事の課題に直面した田澤は、全国の青年団員の勤労奉仕による明治神宮造営を提案した。約15,000人も青年たちが共同生活を過ごしながらかつ神宮造営にかかわり、これが全国的な青年団運動の基礎となり、1925（大正14）年には大日本連合青年団の結成、日本青年館建設という発展を見るようになるのである。1931（昭和6）年には東京小金井の日本青年館分館（浴恩館）において青年団講習所を開設し、1934（昭和9）年から1936（昭和11）年には、日本青年館ならびに大日本連合青年団の理事長を務め、継続的に地域の中堅青年の養成と青年団育成に関わり続けた。

一方、田澤は1920（大正9）年、設立されたばかりの協調会に理事として就任し、労働争議が勃発し労使対立が深まる中、労働者教育にも尽力した。ここでも提案したのは、郡長時代の実践と同様の宿泊講習という形式であった。講師と労働者が寝食を共にした労働者講習会を開催し、同じ人間として対等な立場で語り、学ぶという手法を重視した。

また田澤が力を注いだもう一つの柱は、政治教育である。1923（大正12）年関東大震災によって焼野原になった東京の光景と当時の朝鮮民族に対する日本人の愚行に衝撃を受け、あるべき国家像、すなわちのちに田澤の大きな人生の指針ともなる「道の国日本」を建設するための人々の政治的知識と態度の涵養を重視するようになる。1924（大正13）年には「新政社」を設立し、立憲政治の確立のための政治教育活動を積極的に展開するようになり、普通選挙による総選挙を機に選挙粛正運動を提唱、推進した。本稿は田澤の共同生活論や青年教育論に焦点を置くため、彼の政治教育論、実業補習教育論、公民教育論および国家思想に関しては、他日の分析課題としたい。

以上が田澤の概略であるが、田澤という人物は教育学を中心として歴史学、政治学など幅広い分野において注目されてきた。田澤に関する研究は、社会教育史、日本思想史研究など田澤の実践・思想そのものを取り上げる直接的なアプローチと、ファシズム、リベラリズム、立憲政治、選挙粛正運動、地方自治、協調会など日本近代史、政策史において構造、事象研究の中で田澤を取りあげるといった間接的なアプローチがある<sup>8</sup>。

田澤の活躍は既述したように青年教育、青年団教育を中心に、労働者教育、労働問題、政治教育、政治問題など多岐かつ広範に渡る。それと同時に膨大な量の著作物を遺しており、当然、田澤思想の先行研究の多くはこの著作物と彼から指導を受けた青年たちや青年団員を含む周縁関係者の論文・日記などの分析なのだが、特筆すべき点は先行研究における田澤の評価の多くには、「具体的」「実践」「実践家」というキーワードが含まれているところにある。

例えば、永杉喜輔は社会福祉の実践家である糸賀一雄の著書を引用し、「どんなささやかなあいとなみであっても、それは実践しているという強みがある。実践のなかからうみ出された考案が、地域社会の人びとのかかわりのなかで声となり、力となり、それは施設や政策をゆり動かすものとなる」などは「田澤の青年団指導の実践とその考察にびたりとあてはまる」と、実践に生きた田澤を評価している<sup>9</sup>。

また藤田省三は、明治以来の日本に一貫して存在していた「全生活を空間的な郷土の中だけで行わせようとする、真正正銘の郷土主義」といったイデオロギーの昭和恐慌後の大規模展開の中心的担い手として田澤を挙げているが、「『具体的生活の体験』を強調することによって農民の郷土への定着をおすすすめようとする」と述べている<sup>10</sup>。

武田清子は、明治初期から日本の敗戦に至る時期を通し、思想の自由、リベラリズムを守り育てようとする思想的営みの軌跡をすくいあげる文脈の中で田澤の人間形成論を考察している。その中で「明治以来の絶対主義的天皇制国家の教育とは質を異にする『国民主義』的課題を追求するもの」とし<sup>11</sup>、田澤の人間形成論を国民主義として成功しているかどうかに着目し、近代日本教育思想史に位置づける試みを行っている。武田は田澤の多数の著書を「青年の

ために人間形成の方向をさし示そう」としているものであり、「彼の生涯をかけて青年運動の実践を貫いて追求されてきた教育思想が、ここには見い出せる」と、一貫した実践性を述べている<sup>12</sup>。

戦前公民教育の思想構造を研究する上原直人は、公民館を主体とする戦後の社会教育構想に影響を与え、戦前に置いて学校教育における公民科に収斂せず、重層的性格を見出せる公民教育論を提起した論者の一人として、関口泰、田澤、下村湖人を取り上げている。その中で、関口については講壇的な立場から「立憲的知識の涵養」を重視し、田澤・下村については「実践的な立場から、『生活の場としての地域社会の振興』と結びつけた公民教育論を提起していた点に特徴がある」としている<sup>13</sup>。

以上のように多岐に渡る田澤研究がある中で、本稿では、田澤の青年教育および青年団に関する論稿に基づきながら、なぜ彼は共同生活実践に関わることにこだわったのかに焦点を置き、その思想から今日的な地域社会と人との「かかわりの創出」の方法を模索してみたい。

### 3. 共同宿泊講習実践からみる青年教育思想

田澤と青年とのかかわりは、三つに分けられよう。一つは、青年団—指導者という関係である。これは彼の生涯のフットワークの中軸をなしたものであるが、地域的にメンバーが固定化されている青年団—青年団理論の指導者（田澤）という形でかかわっている。二つ目は、宿泊講習—指導者である。先にも紹介したように、地域中堅青年の育成法として、寝食を共にするこの形式を機会あるごとに提案し、実施している。ここでは、メンバーが長期的に固定化するとは限らない青年たちの集団—田澤という関係になる。三つ目は、本稿のテーマとは少々論点がずれてしまうが、個人としての青年—田澤という関係である。田澤は時間を見つけては、宿泊講習会や篤農青年に会うために全国行脚している<sup>14</sup>。

本稿では、田澤の青年団論そのものを深掘りすることではなく、第二に挙げた宿泊講習における田澤のかかわりの思想を特に見ていくことにする。

#### 1) 宿泊講習の実践例

田澤が静岡県安倍郡長に就任した1910（明治43）年は、都市、農村こそ国家繁栄の基石であり、その改良が全国の発展力を鼓振するものとして、内務省主導によって地方改良運動が推進されている時期である。またその運動の下、地域青年団は村落共同体における自治的機能が残存していると認められ、自治振興を目指す内務省、補習教育の向上と青年の思想善導を狙う文部省にも期待されていた。こうした社会的背景の下で田澤は郡長という任務を与えられ、郡自治の運用を図り、農村行政の監督にあたり、地域の活性化を最大の課題としていた。このような状況下、田澤も地域の中堅青年への指導に当たっていたが「大会などに壇上から幾百の聴衆を相手に大声疾呼しても、なんとなく物足りない」「壇上から眺めた何百という集団ではなく、一人一人の青年たちとしんみり話してみたい」として田澤は1914（大正3）年、蓮永寺にて中堅青年の修養機会を「宿泊」という形で実施している<sup>15</sup>。

この宿泊講習会では、25名の定員で18～26歳の青年たちが一町村から1～2名の割合で、町村長などの推薦で集められた。25名が各組5名に分けて組織化を図り、運営規定が決められ、憲法論、行政論、修養論、補習教育論などの講義が組み込まれた。この宿泊講習会の特徴は定員数でも明らかなように少人数制で、講師と青年たちとの人格的接触による集団的修養が重視されたという点であろう。特筆すべきは、この講習には毎日「散歩」「茶話会」「掃除」がプログラムの一つに組み込まれおり、各町村青年会の事業内容、活動状況などの情報交換や、青年個々の研究発表の時間にあてられていた。田澤本人も「いろんな話をしながら落ち葉を掃いたり、草をむしったりするので、しんみりした気分は、私たちと会員との間の腹の底から融合せしむるのであった」と回想している<sup>16</sup>。

ついで、この蓮永寺宿泊講習会の5ヶ月後、駿河湾に面した万象寺を拠点として、3泊4日に渡る「修養講習団夏

期講習会」を実施している。この講習会も講師と地域青年が寝食を共にし、語り合い、人格的接触によって青年の育成を図る目的は、先の蓮永寺と同様である。さらに先の講習会と異なる点は、今でいうところのテント（天幕）を共同生活の場としたところに特徴がある。田澤は、天幕という道具を使えば形勝の地を自由に選べ、天幕を一つの家としてその集合体を村と見て町村自治の訓練に資することもでき、さらに風雨等の際には困苦欠乏に耐えることによって団結心を向上させる効果が期待できるとしている<sup>17</sup>。

田澤は協調会においても理事という要職に就き労働者教育にも関与していたが、そこでも「使ふ人使はるる人の区別を暫く措き、共に一個の人間として道を求めよう。そこには必ず相共通するものがある筈」と、労務講習会でも「人の人たる所以を究明しよう」と1921（大正10）年2月に6日間の宿泊講習会を国土館にて実施している<sup>18</sup>。ここで特に強調されていたのは、「講師も役員も、講習員と同一舎内において寝食を共にし、すべての共同労作を平等の立場で実践するということ」ならびに「講義は知識を与えるよりも、むしろ、自覚を促し、信念に培うことを主とする」ということだった<sup>19</sup>。

田澤の宿泊講習実践がより拡張的、長期的に具現化した例として、青年団講習所（浴恩館）がある。これは1931（昭和6）年から1937（昭和12）年に渡って中堅青年の指導者養成を目的とされ開設された、50日間にわたる講師と青年たちとの宿泊講習である<sup>20</sup>。田澤はそれまでの宿泊訓練や青年団指導の不十分さを「未だ青年団指導の任に当るべき人材の養成に欠くる所」があり、「青年団指導の第一線に立って、真剣に指導すべき人材の養成」を可能な限り長期の日程で開催したいという強い思いがあった<sup>21</sup>。1933（昭和8）年からは主として田澤と同郷の後輩であり、青年教育に従事していた下村湖人が多忙だった田澤の教育思想に共感し、田澤の代わりに講習所を支えていくことになる。この講習所は講習生である青年たちが班活動をベースとした約2か月の共同生活を送り、田澤や各講師の訓話、講義、視察見学を行っているが、注目すべき点は青年たち自らに規則や役割設定をさせ、主体的に自ら考えることを重視されていた部分であろう。この様子は、下村の小説『次郎物語<5部>』に描かれているが、そこでは青年たちに「この場所は絶海の孤島」と例えられ、偶然にもこの孤島に漂流した者として「人情を存分に生かし」「おたがいに人間をのぼしあうようたえず心を使」い、過去の伝統や慣習、制度、規則がないこの島での「おたがいの生活に組織をあたえるための工夫をこら」すことといった方向性が与えられ、指導者も命令者も不在の孤島の生活は「すべては諸君自身の努力にかかっている」とされているのである<sup>22</sup>。

このころ、「青年訓練所」が1926（大正15年）に公布された「青年ノ心身ヲ鍛錬シテ国民タルノ資質ヲ向上セシムル」ことを目的に全国展開されていたが、その実が軍隊式の「力に基づく威と令」にたよる「鍛え主義」であり、青年を抑圧することも少なくなかった<sup>23</sup>。また青年教育の一つとして塾風教育が存在していたが、それは塾の中心人物すなわち塾長の命令や強制によってなされる上意下達がとられ、塾生の生活と遊離した鍛錬が実質的には行われていたという。田澤の教育思想の具現化を支え、青年団講習所所長を務めていた下村は、中心人物の主観が教育の場を支配することがないように、青年たちの自律性と創造性を重視し、青年たちの横の連絡によって共同生活を創り上げていく方式を理想としていた<sup>24</sup>。ここからも田澤が発案した青年団講習所は、青年の主体的な思考と創造の場を設け、集団に対する協調性、責任感の醸成を図ったことが分かる。

## 2) 青年との距離の重視と青年観

以上、田澤の宿泊講習の代表的な実践を概観したが、元来彼がこの方法を採用した動機は、講演会などで壇上から青年たちに対し、地域振興の重要性や青年としての覚悟の必要性を声高に呼びかけることへの限界と空虚感を感じていたからである。「唯学校を視察して壇の上から話をして居るというだけでは、本当の指導はできない、某君と呼びかけられるやうな指導者でなければ、本当の指導とは言へぬ」と記し<sup>25</sup>、マスとしての青年に対し壇上から一方的な講演によってメッセージを送るという形式に疑問、限界を感じ、「講師と会員と相混じって談笑し、その間に切磋琢

磨し、個人的指導の実をあげることにしたい」と指導者と青年との距離の近さ重視していた<sup>26</sup>。「中堅青年の講習なども、一面には厳粛な静坐遥拝朗誦の行事であるが、同時に音楽があり遊戯があり、体操があつて、修養と娯楽が、講習会を通じて渾然として調和せられるようにありたい」と講習会プログラムについても言及している<sup>27</sup>。ここから人と人が直接出会い、寝食を共にすることで、自己を解放し、他者の立場や価値観の受容をし、友情や仲間意識、引いていけば人として支え有ることの意味の体験的理解を重視したと言えよう。労務者講習会の趣旨の中には「われらは労務者たる前にまず人であり、資本家たる前にまず人である」というモットーが記されており、ここからも田澤が、その時の肩書、立場、職業よりも人としての在り方の追究を重く見ていたかが分かる<sup>28</sup>。

ところで、個や集団にかかわる指導者の決定的な違いを生み出す部分は、どこにあるのか。それは人間（青年）をどう見ているか、あるいは人間（青年）をどう見えているかであろう。すなわち人間（青年）に対する感受性あるいは人間観（青年観）の違いではなかろうか。

では、田澤は青年をどう見ていたか。田澤によれば青年という時期は「人間としての習慣」が出来上がる大事な時期であるという<sup>29</sup>。またこの時期の青年だけが持つ独特なものとして「鋭敏なる感受性」「熾烈なる知識欲」「豊富な想像力」とし、多くの青年の手中には「核心と創造」が存しているからこそ、新たな時代の要求を感受し革新の大義に当たる者と捉えていた<sup>30</sup>。さらに青年の純粹性こそが誇りであり、讚美の正体だとし、心身ともにこの内に秘めている独自性が伸びつつある時期に伸ばすべきとしていた<sup>31</sup>。青年教育が国家の将来にとって重大な意味を持ち、その振興が急務である国家情勢下、青年教育が単なる教育学上の問題ではなく、その振否盛衰が国家の生存に直接影響するといった実際上の問題化となったことを踏まえれば、国家レベルの要職についていた田澤が青年にかかわるのは当然と言える。しかし、上述の彼独自の青年観を見る時、田澤がなぜゆえ青年教育をライフワークしていたのかという行動の立脚理由も見出すこともできよう。

### 3) 青年に何を求めたか

では、彼は青年たちに、いかなる「人間としての習慣」を身に付けさせたかったのか。田澤の膨大なる著作物を読んだとき、彼の教育論の中で重視されている点は二つあると思われる。すなわち、第一に創造力の育成、第二に共に生きる力いわゆる協調性の醸成である。

まず、第一の創造力の育成について見ていこう。田澤は「理性の判断もなく、自己の所信もなく、いたずらに他人の言動に雷同附和」することを恐るべき「国民病」と称し、安易に他者に同調することに厳しく注意している。これに関しては国家論でも同様の主張を繰り返し、欧州文化を排斥するなどは絶対否定すべきだが、しかしそれは一つの資料であって、盲従や無条件の礼賛をするものとしてはならないと断じている<sup>32</sup>。

田澤が他者への付和雷同、批判精神なき安易な同調を否定し、青年たちの創造力、創意力の啓発のために重視・推奨していたのは、具体的かつ実際的な研究経験であった。「研究のない所には、単なる模倣があり、追随」があり、「研究的態度が出来上がってこそ、真に未知の世界を開拓し、未見の我を発見」することができるとして<sup>33</sup>、宿泊講習や青年団において一人一研究や共同研究を提唱していた。

例えば蓮永寺宿泊講習では、村長や県会議員として活躍した江川昌平が寄付した70円の有効な使い方を共同研究の課題としている<sup>34</sup>。また青年団講習所でも各班で研究題目を定めさせ、研究時間を設けその成果を互いに発表させている。一人一研究とは、「自己の職業生活や家庭生活の中に、ただ伝統の墜力によつて引きずらるる労働でなしに、積極的に工夫改善の興味を悟らしめ、いわゆる人生創造の第一義を味わしめる」を目的とし<sup>35</sup>、青年各自が自らの生活の中に課題を見出し、一つのテーマを持って研究することである。田澤がかかわった大日本連合青年団は、この一人一研究の普及を図るため年1回、一人一研究展覧会を実施し、優秀な研究に対しては研究費を支給していたところからも、いかに青年たちに郷土における日常生活や労働生活から主体的に課題を見出し、創造的な課題解決を行

うよう求めていたか推測できよう。そこには一事を深く研究することの経験が、他の問題に対しても相当な見識を与え、青年の創造力と応用力につながるという確固たる教育観、青年観が立脚していたと思われる。

さらに、その研究的態度は、田澤の修養論にも通底するところがある。通常、人間は常識で生きていけるが「何か変わった事にぶつ突かると、常識だけでは自己の行動、或は心の動きを、確然と支配して行くことが出来なくなる」ため「自分を建たしめてゐる心」「何物を以ても動かされない信念の確立」として、田澤は青年に修養を求めていた<sup>36</sup>。

次に第二の共に生きる力、協調性の醸成について目を移そう。田澤の教育思想の根底には、彼自身が「全一思想」と呼ぶ人生観といってもよいものが横たわっている。それは、祖先より子孫に継承された「縦の永遠の生命」と今日を共に生きる家族、地域住民、一国一民族、さらには人類全体において共同生活を営む横の人生が、縦横に影響し合う無限絶大の人生という。この思想には「個々の存在が十分に個性を發揮しつつ、その存在を立派に認めながら、渾然たる全体の調和の中に立つ」として、個としての確立、すなわち田澤の修養観である人としての叡智、聰明さを身につけた「確固たる信念を持つ個人」の確立が原則とされているのである<sup>37</sup>。その上で、個人中心主義的な個在分立論ではなく、共に支え合い、相互に伸びるとはどういうことかを学ばしめようとしていた。

芳井は、田澤の全一思想の論を引き、「この『全一の進展』こそ、『わが大和民族の中心たる皇室』によって表現されるもの」であり、青年を国家的精神に目覚めさせ、その自覚、自発性を皇室に繋げようとしたと田澤の国家論と青年教育を分析している<sup>38</sup>。

本稿では田澤の国家論までは踏み込まないが、田澤の思想には、個性の重視と自由主義の原則が貫かれている。「統一はお飯のごとし。これを食わなければ人は死んでしまうが、食い過ぎればまた健康を害して死んでしまう。ある程度の統一は、国家として絶対に必要であるが、不必要な統一は、国民の創造力を奮って、民族衰頹の原因を述べている。この例えからも田澤の画一主義、統一主義の偏重の批判が伝わるであろう。

こうして創造的、研究的態度、確固たる信念を求める修養を青年論で展開していた田澤の思想の根底には、当時の社会への2つの視点があった。一つは青年への扇動的風潮への批判であり、他方は学校教育の限界性の認識である。

田澤の表現する「老人先輩」たちが「単に青年の歴史的使命を振りかざして、一切の青年を変革に向って駆り立てる」ことは、革命思想家や社会的変動を熱望する者の野心の成就の道具にはなるだろうが、「この種の扇動は、所謂変革のために変革を希求するの心理を作り、青年をして無反省の附和雷同に陥らしむる危険が極めて高い」と断じているのである<sup>39</sup>。「自己内奥の靈性に訴へて、真に正しと信じ、理想と信じる方向に向かって進む」ことのできる力<sup>40</sup>、すなわち自分の行為が自身で納得できるかどうか自己対話力のある青年を育てたかったのではないだろうか。

では、そのような青年をどこで育てるべきか。それは地域社会であり、町村の問題、郷土の問題に切実に接触している実生活であるとする。田澤は、学生やインテリを「実生活を持たない」抽象的な「論理の世界に生活する」者とし<sup>41</sup>、本に書いていないことや教師が知らないことは不可能として、最初から手を着けようとしないう傾向にあるとする。よって詰め込み教育は「生徒自身の心性の開発が自由に伸長する機会を失はしむるもの少なくな」く（加筆：筆者）<sup>42</sup>、「個々人の精神鍛練と知能を啓発する方向は、我が国の教育の長所であるが、共同生活の体験を指導して、よき社会人を作るといことがうまく行っていない点」と指摘としていた<sup>43</sup>。そして「論理の貫徹よりも、相互の譲歩による協力であり妥協」を重視すべきとし<sup>44</sup>、これを体得できるのが共同生活であり、その学習の場の一つが青年団であり宿泊講習としているのである。

日露戦後、日本は軍備拡張中心の戦後経営をはじめ、国家財政は町村財政を圧迫させるほど膨張していた。このような状況下で課題になったのは、財政的、経済的、人的基盤を創出することであり、内務省を中心として地方改良運動が展開されるようになる。この運動下で、町村民育成の中心的担い手として注目されたのが各地の青年団である。1915（大正4）年に第一次訓令によって青年団の振否が「国運ノ伸暢地方ノ開発」に影響するところが大として、青

年団は「青年修養の機関」と規定され、国内の軍国化に伴って徐々に官僚統制的、国家主義的な色彩を帯びていくのは、周知のとおりである。

しかし田澤は、政府が青年団体に関する通牒を発したことに基づいて、それを「官制青年団とののしり、あたかも政府の命令によって、なんら根拠なきところに作りたがるがごとく考えるもの」は「驚くべき誤謬」とし、あくまでも青年団の本質は郷土における自然発生的な青年の社交娯楽の場であり、自治的な社会生活の場と捉えていた<sup>45</sup>。また、一貫として、自然発生的、自然発達の歴史を持った青年団には、特別な法規の根拠もなく、万事漠然としてあやふやなところに妙味も魅力も見出ししていた。特定の指導者が一方的にルールを設定することがなく、「あやふや」だからこそ、過ごし方も楽しみ方も協力の仕方も青年たち自身それぞれの役割や立ち位置なども模索し、自分たちが納得いくように共同生活を創造できる点、すなわち自主自立の精神や自治観念、協調性、責任感を育める点に妙味を見出ししている。この妙味へのまなごしは、彼の青年団の指導論に限らず、青年団講習所の共同生活における運営規則の自主的、創造的起案機会の設定などにも通底しているところがある。

社会教育史において、田澤が青年団の独自の理論を以てして実践者として位置づけられているが、その中でなぜ共同生活論を重視し、宿泊講習という方法を強調し青年に向き合ってきたのかという解の一つは、ここにあるのではないだろうか。

田澤の青年教育思想に一貫しているのは、一つに青年の内に秘めている可能性と純粋性を信頼している点、もう一つは田澤自身も出会った青年から学び続ける姿勢にある。教育の真の原動力は、作物が育ち実ることと本質を同じとし、「深い大きい心」と「聖愛」であり、基礎的条件であって、これを以てして青年の持つ内なる生命や可能性の伸び行くこと、導くことが教育者の使命としているところからも、青年の成長に対する性善説的まなごし観が看取できるのではないだろうか<sup>46</sup>。

田澤は内務省官僚であり、政治家であり、国家における様々な社会的団体の編成および活動推進、特に国家的精神を持った青年を育成する責務と求められる立場にあった。そのため教壇的なかわりを行うよりも、青年と直接的に、しかも比較的長期的な共同生活による接触を以て、青年たちの現状やニーズ、志向を捉えようとしていたのも想像に難くない。しかし、以下の田澤の教育論特に指導者論からは、田澤本人が人としての未完成さを自覚し、常に学び続けることを重視していたと筆者は感じるのである。

われわれはみな、未完成の人である。その未完成より完成に向ってのはてしない旅路をあえぎあえぎ進みつつあるがおたがいである。だから人を指導するのじゃない、相携えて、ともに進もうというのだ。つまづきながら、転びながら、いっしょに手をとって進みたい。人よりも余計につまづき転んだ経験があるだけに、若い人に対する一日の長として、時に指導らしい態度もとるが、要するにそれは、ご同行である。相互である。あるいはご同行の先達である<sup>47</sup>。

武田は田澤思想を「個人を尊び、主体的個人が全体（社会、国家、人類）に奉仕するものとしての人間観、正義と愛と自由をみざす実践的人間形成へと新しく展開を試みようとする側面を含まれていた」意味で、「日本の精神的伝統に根を深く持ちながら、普遍的、人類の展望につらなってゆく日本リベラリズムの一つのタイプ」とした<sup>48</sup>。そのうえで彼を「理想主義」「ロマン主義」と評している部分が多々出てくるが、おそらくこのような青年観、人間観も含まれるかもしれない。

田澤の青年教育方法論を語るとき、宿泊講習や青年団育成への執着が見えると表現しても過言ではない。それほど強調した理由は、青年同士あるいは青年と講師が人格的接触への確固たる信頼であったと思われる。壇上からの一方的なメッセージを送るという方法あるいは詰め込み教育という論理の世界のみに閉じこませる教育方法よりも、多様な価値観や考え方を持つ者同士が集い、双方向的に刺激を与え合えば、人間の潜在的可能性や個性、創造力の獲得が

期待できると確信していたのだろう。

#### 4. 田澤思想は現代に何を訴えるか

本稿冒頭に挙げた通り、人間関係の貧困化と子どもの集団離れに伴い、社会的孤立化が深刻しつつある今日、自分の存在を他者との関係の中で実感し、顔の見える直接的な関係を形成できるかかわりの場の創出が求められている。かかわりを通し、社会に新たな価値を見出し、自己の充実と生活の向上そして地域活性を望める場の必要性を考える時、本稿における田澤の教育思想から何をすくいあげることができるのだろうか。

##### 1) かかわりの場・機会を創出するファシリテーターとしての在り方

筆者は田澤の教育思想から場を創り出すファシリテーターの在り方を学べるのではないかと考える。今日、ワークショップやグループワークなどは学校教育、社会教育、企業研修、地域づくりなどあらゆる場面で採用されるようになってきている。特に地域課題に対して、若者が積極的に参画し、十分な対話を通して新たなアイデアを創発し、それを“ジブンゴト”として捉えることを促す方法として期待されている。

ここで重視されるのが、参加者・学習者同士つまりグループ構成員同士の対話である。元来、対話とは「言葉を通して率直に話し合う中で新しいものを一緒に見つけていくもの」であるが<sup>49</sup>、何気ない会話や雑談から対話への昇華の決め手になるのが、ファシリテーターという役割である。ファシリテーターとは、グループワークやワークショップの促進者であるが、根底には直接的かつ人格的接触から対話は生まれるものという信頼が存在すると思われる。田澤の青年教育論における共同生活の重視においても、人格的接触から生じる対話を求め、人は人に反応しながら有機的につながることを根本的に信じているところが看取できる。また、田澤は一方的に教授することよりも、むしろ共同生活におけるルール作りや郷土課題など解のないような問いを青年たちに尋ね、彼らの創造力や思考力、主体性の伸長を求め続けてきた。今日におけるワークショップファシリテーターの第一人者・中野民夫はファシリテーターとは、みんなが対話モードに入るため探究を深め、新たな視点を生み出す問いを投げる役目としている<sup>50</sup>。換言すれば、問いを投げかけ、グループメンバーへ思考を促し、対話、協力、創造力を駆使する学びを生み出す仕掛け人である。

また中野によれば、ファシリテーターはグループの対話の場は、「誰がホールドしているか、という責任」を持つという<sup>51</sup>。すなわち、それは支配でも操作でもなく、「大きく腕を開いて場の全体をそっと支える」ものという<sup>52</sup>。この対話の場を見守る上で重要な前提は、目の前のグループは異なる個性の集まりであるという認識であろう。多様な人々の個性、価値観の背景にあるコンテクストの相違を認め、対話を促すことで、その場に化学反応が生じ、相互に創発されうるのである。その個人レベルの創発が場全体にうねりをもたらし、直面している課題やテーマに新たな解や意味を見い出せるのではないだろうか。

田澤の青年教育実践とそこに底流する思想からは、地域の青年たちを壇上から指導・支配するという手段を取らず、いかにして青年たちの関係づくりの中から創発を生み出すかを重視していることが浮き彫りとなる。急激な過疎化、高齢化、グローバル化が進む今日、私たちは地域的資源を活用し、人と人をつなげネットワークの新しい形を模索する時を迎えている。これは本稿が焦点化した子ども・青年・若者に限ったことなく、「人生100年時代」と言われる今日では、年齢に関係なく何人とも直面している課題である。牧野篤は、楽しみや志を同じくする人々のかかわりを「志縁関係」「楽縁関係」と呼んでいるが<sup>53</sup>、まさに地域において、対話を以てこのような関係性をどう構築するか。私たちがこの問題に直面するとき、かかわりの場と機会を創出し、支える思想・まなざしを持つ存在がこれから問われていく。もちろん田澤が生きた時代と21世紀という時代は、国家、地域、政治のあり様も人々の生活も比較にならないほど変化・変容している。しかし、地域コミュニティが崩壊している今日、人が多様な他者・社会とかかわることの再検討を迫られている今日では、個人的課題や地域的および国家的課題を“ジブンゴト”としてどう捉えてさせ

ていくかという点で、まさに田澤はファシリテーターという立ち位置への示唆を与えているともいえるのではないだろうか。

## 2) 今後の課題

田澤の共同生活論、宿泊講習論に関しては、田代武博は「宿泊講習会は青年団の県・郡単位での連合化の意義を考察する上で重要な手がかりを示す事業と考えられ、その提唱と実践の過程を明らか」にすべきという視座をもって研究を行っている。その中で宿泊講習会の普及・定着は田澤義鋪のはたらきが大きかったとして、田澤の人の動かし方に着眼し、修養団における宿泊講習を紐解き、中堅青年指導技術論についての考察をしている。

田代によれば、田澤の宿泊講習の特徴は①「どうにでも評価できる」情的側面の重要性を説き、一定の「かたち」が成立するための技術論が田澤の青年（団）指導論において展開されたこと②「かたち」として作ったものを、青年団関係者に定着させるために宿泊講習会という方法が有効であった点とし、宿泊講習は、何らかの顔見知りの事実を作らせ、国家的危機に対して見てみぬふりできぬようにさせたとしている<sup>54</sup>。しかし、この論文は田澤も関わっていた「修養団」における宿泊講習会を中心として書かれており、田澤が数量的測定の困難な情的側面を重視し、国家に対して無関心が通じる状況ではなくするように導いたかどうかは、より田澤の教育方法論と国家論を関連付け、紐解く必要があるといえよう。

田澤に関する先行研究は多岐に渡っていることは、先述したとおりである。本稿では、田澤の代名詞といってもよい青年団に関する思想にもほとんど触れておらず、実業補習教育論をはじめ、公民教育論、政治教育論、補習教育論、国家論にも言及していない。田澤義鋪という人物にせまる場合、彼の各論の考察を丹念に行い、そこに底流していたものは何かを見出す必要がある。そういう意味では、今後の課題としては、田澤が遺した膨大なる著作物と実践から各教育論を考察する必要があることは言うまでもない。

## 文 献

- 1 OECD, 'Society at a Glance:2005 'CO2.1 Social isolation: Proportion of respondents who rarely or never spend time with friends, colleagues, or others in social groups' ([https://read.oecd-ilibrary.org/social-issues-migration-health/society-at-a-glance-2005\\_soc\\_glance-2005-en#page79](https://read.oecd-ilibrary.org/social-issues-migration-health/society-at-a-glance-2005_soc_glance-2005-en#page79)) (最終閲覧2018年11月12日)
- 2 内閣府「高齢者の生活と意識——第8回国際比較調査結果報告書」2016年。([http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h27/zentai/pdf/kourei\\_h27\\_2-7.pdf](http://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/h27/zentai/pdf/kourei_h27_2-7.pdf)) (最終閲覧2018年11月13日)
- 3 鷺田清一『だれのための仕事』講談社学術文庫、2011年、166-181頁。なお鷺田は、『しんがりの思想 反リーダーシップ論』（角川新書、2015年）でもコミュニティと孤立貧の関係性について言及している。
- 4 ロバート・D・パットナム『哲学する民主主義 伝統と改革の市民的構造』NTT出版、2001年、206-207頁。
- 5 内閣府「特集 今を生きる若者の意識～国際比較からみえてくるもの～」『平成26年版 子ども・若者白書』<http://www8.cao.go.jp/youth/whitepaper/h26gaiyou/tokushu.html> (最終閲覧2018年11月12日)
- 6 同上。自己肯定感の認識項目は以下の2つである。いずれも数値が高い順から示すと、図表1「自分自身に満足している」：アメリカ86.0%、イギリス83.1%、フランス82.7%、スウェーデン74.4%、韓国71.5%、日本45.8%。図表2「自分には長所がある」：アメリカ93.1%、ドイツ92.3%、フランス91.4%、イギリス89.6%、韓国75.0%、スウェーデン73.5%、日本68.9%。(最終閲覧2018年11月12日)
- 7 田中治彦編著『子ども・若者の居場所の構想 「教育」から「関わり」へ』学陽書房、2001年、17-19頁。
- 8 このアプローチの区分は上原直人に拠った（『近代日本公民教育思想と社会教育 戦後公民館構想の思想構造』

- 大学教育出版、2017年、116頁)。
- 9 永杉喜輔「日本教育のアウトサイダー——田澤義鋪研究——」群馬大学教育学部紀要、人文・社会科学編23、1973年、191頁。
  - 10 藤田省三「天皇制とファシズム」『天皇制国家の支配原理』1966年、未来社、159-160頁。
  - 11 武田清子「田澤義鋪における国民主義とリベラリズム」『日本リベラリズムの稜線』岩波書店、1966年、181頁。
  - 12 同上書、190頁。
  - 13 上原、前掲書、31頁。
  - 14 全国の青年たちと出会い、彼らからどのような刺激を得たのかということをも田澤は、「私を感激せしめた人々」「旅塵」「旅ごろも・半月記」にまとめている(いずれも『田澤義鋪選集』所収)。以下、田澤義鋪記念会『田澤義鋪選集』(研文社、1989年)を『選集』と記す。
  - 15 田澤「青年団の使命」『選集』、367頁。
  - 16 安倍郡連合青年会『青年宿泊講習会記録(修養団記録帳)』1914年、1頁。
  - 17 田澤「中堅青年の養成」『選集』、540頁。
  - 18 田澤『青年如何に生くべきか』日本青年館、1937年、75-76頁。
  - 19 下村湖人『田澤義鋪』田澤義鋪記念会、1954年、106頁。
  - 20 下村湖人の『次郎物語』(第5巻)は、この様子がモデルと言われている。また筆者は20年前にこの講習所修了者のインタビュー記録を残している。(三瓶千香子「浴恩館において下村湖人が育てた人——岩手県盛岡市の古館正次郎氏を訪ねて——」『生涯学習フォーラム』紀尾井生涯学習研究所、3巻1号、1999年)。またこの講習所の開設と過程を整理している論文としては上原直人「青年団講習所の実像——その開設と展開過程を中心に——」『生涯学習・キャリア教育研究』第13号、2017年がある。
  - 21 上原、同上書、11頁。
  - 22 下村湖人『次郎物語<五部>』ポプラ社文庫、1995年、50-55頁。
  - 23 宮坂広作『近代日本社会政策史』国土社、1966年、223頁。
  - 24 下村湖人『塾風教育と協同生活訓練』三友社、1940年、14-15頁。(『下村湖人全集6』国土社、1975年に所収)
  - 25 田澤「中堅青年の養成」『選集』、541-542頁。
  - 26 田澤「青年団に就いて」内務省地方局編『第十六回地方改良講演集』良書普及会、1923年、21頁。
  - 27 田澤、前掲書、「青年団の使命」、326頁。
  - 28 田澤「労務者講習会の経験より」『選集』、544頁。
  - 29 田澤、前掲書、『青年如何に生くべきか』、84頁。
  - 30 同上書、2～3頁。
  - 31 同上書、154頁。
  - 32 田澤「道の国日本の完成」『選集』、109頁。
  - 33 田澤、前掲書、『青年如何に生くべきか』、235頁。
  - 34 70円は当時の小学校長の2か月分の給与に値したという。
  - 35 田澤、前掲書、「青年団の使命」、367頁。
  - 36 田澤、前掲書、『青年如何に生くべきか』、279-280頁。
  - 37 田澤「青年修養論人生篇」『選集』、489頁。
  - 38 芳井研一「田澤義鋪論」『人文科学研究』53、1978年、15頁。
  - 39 田澤、前掲書、『青年如何に生くべきか』、4頁。

- 40 同上書、8頁。
- 41 同上書、86頁。
- 42 田澤、前掲書、『青年如何に生くべきか』、42頁。
- 43 田澤「青年団教育の回顧」『選集』、527頁。
- 44 田澤、前掲書、『青年如何に生くべきか』、86頁。
- 45 田澤、前掲書、「青年団の使命」、301頁。
- 46 田澤、「旅塵」『選集』655頁。
- 47 同上書、766頁。
- 48 武田、前掲書、218頁。
- 49 中野民夫・堀公俊『対話する力 ファシリテーター23の問い』日本経済新聞出版社、21頁。
- 50 同上書、39頁。
- 51 同上書、178頁。
- 52 同上。
- 53 牧野篤『人が生きる社会と生涯学習』大学教育出版、2012年、263頁。
- 54 田代武博「田澤義鋪の中堅青年指導論」『九州大学教育学部紀要（教育学部門）』第43巻、1997年、45-55頁。
- ・永杉喜輔「田澤義鋪——社会教育史資料——」『群馬大学紀要 人文・社会科学編(15)』群馬大学、1966年、1-19頁。
- ・永杉喜輔「日本教育のアウトサイダー——田澤義鋪研究——」『群馬大学紀要 人文・社会科学編(23)』群馬大学、1973年、185-203頁。
- ・木村勝彦「戦前における公民教育についての予備的考察——田澤義鋪の政治教育論と公民教育」『茨城大学教育学部紀要教育科学(52)』茨城大学教育学部編、2003年、31-42頁。法政大学大原社会問題研究所編 梅田俊英・高橋彦博・横関至『協調会の研究』柏書房、2004年。
- ・青山鉄兵「戦後初期社会教育論における『集団』の検討」『生涯学習・社会教育学研究』第30号、2005年、41-51頁。
- ・番匠健一「1910年代の内務官僚と国民統合の構想——田澤義鋪の青年論を中心に——」『Core Ethics』6、立命館大学大学院先端総合学術研究科、2010年、361-374頁。
- ・安斎勇樹『協創の場のデザイン——ワークショップで企業と地域が変わる』幻冬舎、2014年。
- ・西村桂哲『かかわり方のまなび方——ワークショップとファシリテーションの現場から』筑摩書房、2014年。
- ・ロバート・パットナム 柴内康文訳『孤独なボウリング 米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房、2015年。
- ・青山鉄兵「IFEL・青少年指導者講習会におけるグループワークの特徴および歴史的位置付け——D.Sullivanによる講義内容に注目して——」『日本生涯教育学会年報(37)』2016年、169-186頁。
- ・奥田知志・茂木健一郎『「助けて」と言える国へ——人と社会をつなぐ』集英社、2016年。